

にんげん

きょうも治療日和 57

記憶の扉5

日頃、先生方も患者さんと接していて、患者さんの慢性的な痛みの背景に負のエピソード記憶が折り畳まれていると感じることがあると思います。その負のエピソード記憶にはうっ積した感情、たとえば怒りや不安という情動が必ず憑きまっています。「痛み」は身体の感情表現であるという言い方があります。痛覚神経の回路は痛みの部位とその損傷の程度を知覚の中枢に伝え、もうひとつ前回述べたように感情中枢の扁桃体に行く回路もあるからです。つまり、痛みは「嫌い、辛い、苦しい、悲しい、不安」という負の感情の身体表現でもあるのです。ですからこのような感情の表出により痛みの閾値は影響され、低い刺激でも痛みがでることがあるのです。伴侶を亡くした人がなんでもない会話のなかに故人のエピソード記憶を結びつけ、その悲しみに胸の痛みが表れるのです。しかし、わたしは常々自戒をこめて思っていることがあります。それは、わたしの治療は身体に働きかけるものであり、精神科医やセラピストのそれではないということです。精神分析や心理療法には、それはそれでしっかりした理論的な根拠と慎重にクライアントと接するノウハウがあります。とくに、うっ状態を伴ったケースでは不用意な意見や言葉が患者さんを傷つけることにもなりかねません。ですから、痛みの原因を詮索してあれこれ過去の記憶

に結びつけ、精神分析医もどきの言い方はしてはいけないと思うのです。患者さんの話から、不快な記憶の蓄積によって筋肉が硬くなったり、血流を滞らせていると確信してもです。というのも、本当のところどうかはわからないからです。つまり、わたしが聞いたのは患者さんの膨大なエピソード記憶のほんの一片なわけで、それで判断するのは危険なことです。また、記憶には作られた記憶もあり、あるいは誤解している記憶もあり、何が原因になっているか判断することは非常に難しい作業です。わたしが若い時分、数人で熱めの議論をしたとき、1人の友人が別の友人に発した言葉で「おまえは砂浜をみて海を語っている」というのがありました。つまり、ほんの一片の認識で世界を語ることの愚かしさを断じたのですが、この言葉をなにかにつけ思い出します。ですから、患者さんからさまざまなエピソード記憶を聞いて、痛みなどの症状の原因に繋がっていると確信しても、それはあくまでわたしの心のなかでの話しです。つまり、患者さん対しては聞き役に徹することが治療者に大切なことだと強調したいのです。うっ積した記憶を患者さんが持っていて、治療者を信じて自ら話しはじめれば、それは治癒を促すことになると思います。つまり、テニスの壁打ちの、壁になることが大切だと思うのです。そして、壁から跳ね返ってくるボールを受け取るうち



に、患者さん自身が何が原因だったのか「気づく」ことが大切と思うのです。それに、身体が癒されれば、患者さんはいろいろな意味で寛大になると思います。その気持ちのゆとりが、原因について素直に「気づく」チャンスを増やすと信じています。もちろん、患者さんに医学的な情報をわかりやすく説明することは大切です。また、患者さんが持っている知識の誤解が、痛みにつながることもあるかもしれません。ちょうど1年前に、50代前半のKさんという女性の患者さんからインプラント手術について聞かれました。一般的な知識としてかなり技術が成熟してきたので、義歯だけでなく充分選択肢の一つだと話しました。結局、地元でもまあ評判の良い歯科医院でインプラント手術を受けることになりました。手術自体は大学病院から出張してくる医師がやり、あとの人工歯を入れるのはその医院の医師がやるというシステムでした。最初のうちはその医師の印象を言葉が少ないけど誠実でとても丁寧だと喜んでいました。インプラントが骨に結合する期間がすぎて、歯肉が落ちつく期間も終わり、いよいよ仮歯が入った4ヶ月後のことです。そこまでは歯の痛みもさほどなく順調にいきました。ところが、仮歯の接着剤が弱いため何度もとれてしまったことが、Kさんに強い不信感を与えたのです。以前、娘さんもインプラント手術をしたのですが、本歯を入れ終了したのがたった数日間であったことで、その慎重すぎる対応にも疑いをもつ

ていました。そして、何度も仮歯が取れるうちに医師への不信感が増幅していきました。そして、とうとうインプラントをいれた左頸部と肩に強い緊張と痛みでできたのです。Kさんは定期的に施術をしているので、この頸部と肩の緊張は左頰関節周囲の緊張もあり、明らかに歯と関係していると思いました。わたしもインプラント手術のことをいろいろ調べてみました。すると驚いたことに、本歯が入るまでの期間が数日で終わるものから、1年近くかかるやり方があるようです。そこで、Kさんには、仮歯を強く接着すると本歯を入れるとき土台に影響があるから、その医師の処置は正しい。日数をかけ結合したほうが耐用年数も長くなる。年齢があがると結合させる期間は長めになるとプラスの情報を伝えました。とにかく、Kさんのインプラントの知識を書き換えて、医師への不信感を取り除いたのです。それをしつこくKさんも納得しました。それから、笑うしかないくらいに何度も仮歯がとれたのですが、頸部や肩のコリは多少あるものの痛みにはならなくなりました。10ヶ月後に本歯がはいりました。その本歯は具合もよくKさんも満足したのでした。もちろん、左頸部と肩の症状も消えています。このケースでは記憶している知識の書き換えをすることで医師への不信感がやわらぎ、痛みの閾値が変化したのではと思っています。しかし、この見方だって「砂浜をみて海を語っている」のかも知れません。



かん さつ